

幼児教育における児童文化

—実習保育所における児童文化の現状について—

吉田博子・藤田佳子

(2006年11月11日受理)

要 約

近年の子ども・若い親・保育者志望学生を取り巻く生活文化環境を児童文化の視点から把握する目的のもとに、保育所における児童文化の現状（絵本・紙芝居・パネルシアター・テレビ）について保育者養成課程在學生（保育所実習を経ている学生）を対象に質問紙調査を行った。その結果、この4つの児童文化はどれも日常的な保育活動として活用されており、その方法、場面、子ども達の受け入れなどにそれぞれの違いや特徴が明らかになった。

親世代が活字より映像を好む世代になるとともにテレビ・ビデオ利用への寛容度が増し、今後ますます子どもの生活に取り入れられ活用される児童文化になると予想される。現状でも各家庭でのテレビ・ビデオ視聴はきわめて早期から始まっており、視覚映像メディアが児童文化として利用される傾向が増大することはいまや否定できない潮流であろう。

本来子どもたちは対面で接することにより安心感や暖かさ、居心地のよさを感じ、verbel-nonverbal のやりとりを通してコミュニケーション力、対人関係力、生きる力を学び高めていく。であれば子どもの生活や遊びの充実のためにも「対面文化」の重要性を見直し再認識することが肝要である。また、対面文化である絵本・紙芝居、パネルシアターを継承すべき対面文化として子どもの心に届く児童文化として与えられる表現力・技術力・支援力を持つ保育者の養成が求められる。さらに、親世代・保育者・保育者志望学生の児童文化観・メディア観の育成、児童文化の媒介者としての自覚、児童文化環境づくりがますます重要になると考える。

キーワード 児童文化、ことばのやりとり、遊びの充実、動的反応、対面文化

1

研究に対する問題意識

1. 児童文化研究の意義

児童文化ということばは、大正末期から昭和初期にかけての童心芸術運動、児童芸術雑誌の出版文化の中から生まれてきた日本独自の新造語で、児童の基本的な人権を守

り、子どもを取りまく文化や文化財を近代化しようとする認識のもとに進められてきた運動の中心理念を示す語であり¹⁾、有形の児童文化財……(中略)……児童文化の政策・活動・施設・運動を包含した統一概念²⁾として、日常生活から人間形成の諸過程、社会的児童保護全般を包括するきわめて広範な概念として用いられるようになったのである。歴史的に見ると児童文化研究・児童文化運動は「児童に与えられる『文化財』を文化的にすることによって、児童の生活そのものを望ましいものにしようとする」ことを目的とし、児童の成長発達のために与える文化財・子どものための文化創造の問題と同存的に「成長過程を進む児童自身による文化創造」という面を見おとしはならないとしてきたのである。³⁾

今日においても児童文化の問題は児童文化を通して子どもの心にどのような活動を呼び覚ますかという問題として考えていかねばならないであろう。子どもの日常生活に多様な視覚映像メディアが進出し子どもたちを魅了するようになっている。この現状を踏まえるならば、子ども自身の考え方、感じ方、生き方の変革を相伴する児童文化、子どもが自分の心に論理的感性的な筋道をつけることが可能な児童文化環境を整えていく必要がある。これが現状にかかわる重大な課題になると考える。

(2) 保育教育の原点と児童文化の現状

乳幼児期の保育教育は「遊びを通して」「環境を通して」を基本原理としており、倉橋惣三が「生活を生活で生活へ」⁴⁾というように「生活を通して、それを本当の生活にしていく」⁵⁾が乳幼児期の保育教育の基本である。

「育児・教育の文化が人を形成する」⁶⁾というように、生活の中に保育教育の実際が生まれてくるのであり、生活のありようによって大きな相違が生ずることになる。生活・遊び・遊具が子どもの発達や価値にどのような影響を与えるのか、子どもの生活や発達を創造していくうえに有効に働いているのか、どのような生活・環境・遊びを選択し準備し援助することが望ましいのか、親や保育者はたえず考え判断することが求められている。また、子どもは日々の生活のなかで大人の姿を見つめ生活を共にすることを通して、遊びの充実、内面の充実、生活の充実を知っていく。しかしながら、若い親も若い保育者も「遊びを知らない」「遊んだ経験が少ない」「遊びによる内面の充実を知らない」^{7, 8)}という危惧が語られている。たしかに遊びの面白さを自分でとらえていなければ、遊びの充実、内面の充実、生活の充実はとらえられないであろうし、子どもの遊び・内面・生活を見る力、捉える力、育む力が停滞したり歪みが生じる恐れさえある。

以上を踏まえて、若い親、若い保育者がどのような遊び、児童文化に触れてきたのか、どのような遊びの充実、内面の充実、生活の充実を得てきたかの検討を目的として「幼児教育における児童文化」の研究を進めていきたいと考えている。

なお、「幼児教育における児童文化」の研究は上記の問題意識のもとに、近年の子ども・若い親・保育者志望学生を取り巻く生活文化環境とその変化について、児童文

化の視点から把握することを目的として「実習保育所における児童文化の現状」「保育者をめざす学生の児童文化の受容と継承」の二つの調査研究を進めてきた。

本論は前者の「実習保育所における児童文化の現状について」の報告である。後者については後日発表の機会を得たいと考えている。

II 実習保育所における児童文化の現状について

1. 調査の目的

本調査は「幼児教育における児童文化」研究の導入段階として保育者をめざす学生を対象に質問紙調査を行い、実習保育所における児童文化の実施・取り組みの現状を把握し継続研究への基礎資料とする。

本調査は保育所実習終了後の保育者養成課程在学学生を対象にして行ったため、保育所の保育方針と児童文化の実施状況との関連性が十分にとらえられていない可能性があり、現状把握について限界と偏りがあることを予め断っておきたい。保育所における児童文化の現状を把握するには、保育所を対象とする実態調査もあれば、保育所に勤務している保育士を対象とする実態調査もあるが、本調査は実習学生の目でとらえた保育所における児童文化の現状であり、学生の目を通したものであることに意義があるとすれば新鮮なまなざしで保育をとらえているものと考えることが出来る。

2. 調査の方法と内容

(1) 調査対象・調査方法・調査時期

東京都内 A 短期大学の保育者養成課程に在籍する学生（1・2年生の女子）を対象として集団法による質問紙調査を2006年9月に実施。回答数は127、有効回答数は96である。

(2) 質問項目

絵本・紙芝居・パネルシアター・テレビ・ビデオなどの児童文化の実施状況（保育に取り入れている時間・内容・子どもの様子・先生の存在の有無）、子どもとのやりとりの観点についての質問によって第一調査を構成した。

結果と考察

1. 実習保育所における児童文化の現状

(1) 絵本・紙芝居・パネルシアター・テレビの現状

①実施状況

4つの児童文化の実施状況（問「実習した保育所では、絵本・紙芝居・パネルシアター・テレビ（ビデオ）を保育に取り入れていましたか」の結果）を表1に示す。

絵本の読み聞かせと紙芝居は、いずれも高い割合で（79%～）で日常の保育に取り入れられており、基本的な活動のひとつとして定着していることがわかる。

それに比べて、パネルシアターとテレビは50%余の割合で保育に取り入れている。テレビ視聴が55%という高い数値を示したのは、やや筆者の予想と反したものであった。

表1 児童文化の実施状況 ※■は50%以上

％	取り入れている	取り入っていない	未記入
絵本	94%	3%	3%
紙芝居	79%	18%	3%
パネルシアター	53%	45%	2%
テレビ	55%	43%	2%

集団保育の場である保育所では、一方向的に映像と音声を流すテレビやビデオといった児童文化は、保育所の目的から鑑みてあまり好ましいものではないという筆者の認識があったからである。なぜ50%以上も利用されているのか興味深い所である。

②実施されている時間帯

実施している時間帯（問「実習した保育所では、どういう時間帯に実施していましたか（複数回答）」）の結果を表2に示す。

絵本・紙芝居は圧倒的に「おひるね前」に多く使われ、「昼食前」にも比較的良好に使われている。これは、活動的な幼児の行動や気持ちを落ち着かせるための手段のひとつとして活用されていることがわかる。

パネルシアターは「午前の保育」「行事」を中心に活用されている。日常的な活動としても、大勢でも一緒に楽しむ事が出来るため行事のプログラムとしても組み込まれている。ただし、行事の中で行うパネルシアターは大掛かりなものになりがちで、準備に時間や練習が必要となるため使用頻度に影響が出ることが考えられる。

テレビは「延長保育」「早朝保育」で多く使われている。この時間帯は人手が少なく、テレビ・ビデオなどの視聴覚教材を導入・利用することによって安全でなおかつ番組内容によっては質を維持した保育を可能にしていることがわかる。これにより、なぜテレビ・ビデオの実施状況が50%以上であるかという現状を理解することが出来る。

表2 実施している時間帯

※■は15%以上

%	早朝保育	午前の保育	昼食前	配膳中	昼食時	おひるね前	おやつ前	午後の保育	延長保育	雨天時の保育	行事	その他
絵本	6%	9%	14%	0%	3%	36%	6%	10%	11%	1%	0%	4%
紙芝居	4%	13%	15%	0%	2%	32%	2%	13%	13%	4%	0%	2%
パネルシアター	5%	22%	8%	3%	0%	4%	5%	11%	5%	7%	21%	9%
テレビ	16%	9%	2%	2%	6%	7%	1%	13%	28%	7%	0%	9%

また表3・4、図1が示すように、番組内容としてはアンパンマンを筆頭に「アニメ関係」が視聴の約5割を占めている。NHKの教育テレビやお母さんと一緒を含む「教育関係」が3割を超え、日本昔話や名作の「お話関係」も1割を超えている。これらを合わせると9割以上となり、内容的にはかなり吟味されていることがわかる。

表3 アニメ関係の主な番組名

アンパンマン	27%
ドラえもん	3%
しまじろう	3%
ポケットモンスター	3%

表4 教育関係の主な番組名

NHK教育テレビ	18%
お母さんと一緒	8%

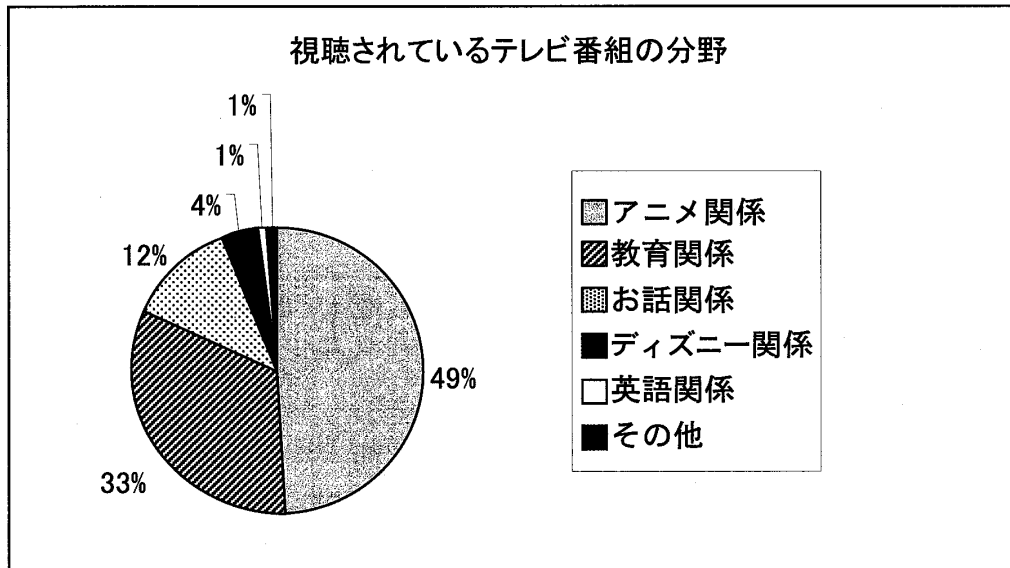


図1 視聴されているテレビ番組の分野

(2) 実施・視聴時の子どもの様子

①実施・視聴時の子どもの様子(5項目)による検討

表5(問「4つの児童文化の実施・視聴時の子どもの様子はどのようでしたか(複数回答)」の結果)をみると、どの児童文化も「黙ってじっと見ている」「指さしをしたり、笑ったり、言葉を発しながら見ている」ことがわかる。この結果から、絵本・紙芝居・パネルシアターを子ども達は集中して見ており、興味あることや楽しいことには反応しながら見ていることがわかる。

表5 視聴時の子どもの様子(5項目) ※■は15%以上

%	黙ってじっと見ている	友だちと顔を見合わせながら	指さしをしたり笑ったり	あわせて歌ったり手をたいたたり	友だちと一緒に笑ったり話したり	その他
絵本	42%	5%	32%	11%	10%	0%
紙芝居	35%	11%	31%	9%	14%	0%
パネルシアター	17%	5%	33%	24%	10%	11%
テレビ	28%	8%	27%	19%	17%	1%

②静的な反応・動的な反応による検討

先に検討した5項目を静的な反応、動的な反応に分けてまとめてみる。

静的な反応項目(言葉をあまり発しないで見ているもの)には「黙ってじっと見ている」「友だちと顔を見合わせながら見ている」が該当する。動的な反応項目(言葉を発しながら見ているもの)には「指さしをしたり笑ったり言葉を発しながら見ている」「児童文化の視聴にあわせて歌ったり体を動かしながら見ている」「友だちと一緒に笑ったり話したりしながら見ている」が該当する。静的な反応項目は2項目であり、動的な反応項目は3項目あるので、比較をするためにそれぞれの平均値を表6に表す。

表6 静的な反応項目・動的な反応項目の平均値

%	静的な反応		動的な反応		
	黙ってじっと見ている	友だちと顔を見合わせながら	指さしをしたり笑ったり	あわせて歌ったり手をたいたたり	友だちと一緒に笑ったり話したり
絵本	24%		18%		
紙芝居	23%		18%		
パネルシアター	11%		22%		
テレビ	18%		21%		

この分類で整理したところ、児童文化ごとの特徴がみえてきた。表6によれば、どの児童文化も動的な反応にそれほど大きな差がない。

つまり、子ども達は楽しいこと、興味あることに対して笑ったり、話したり、体を

リズムに合わせて動かしたりしながら、自分を表現していることから、どの児童文化も子ども達は同じように楽しみ、遊びのひとつとして受け入れている。

それに対して、静的な反応には児童文化ごとの違いがみられる。

絵本・紙芝居は、声をあまり出さずに静かに見る傾向がある。しかし、パネルシアターは静かに観るというよりも一緒に歌ったり、やりとりをしたり、声を出しながら参加する傾向が強いことがわかる。これは実施時間帯の違いとも一致する方向にあることは興味深い。

テレビはわずかだが動的な反応が静的な反応を上回っている。テレビは一方向的な視覚映像の児童文化であるが、一緒に見る相手・仲間があることによって、番組を見ながら笑ったり、指さしをしたりしており、必ずしも受動的な受け入れではなく、テレビ・ビデオを話題・興味の媒介として友達とコミュニケーションをしながら、楽しんでいることがわかった。

(3) 対面文化・非対面文化

4つの児童文化を「対面文化」⁹⁾と「非対面文化」に分けるならば、絵本・紙芝居・パネルシアターは「対面文化」であり、テレビ・ビデオでは「非対面文化」である。

「対面」つまり“face to face”で子どもと接するか、「非対面」かは、子どもに大きな影響を及ぼす。

“face to face”によって与えられる心理的な作用や伝わる情報量は計り知れないものがあり、子どもは親や保育者の「生の声」や「豊かな表情や態度」に接することにより、安心感や暖かさ、居心地の良さを感じる。また「声かけ」によって励まされたり、認められたり、verbal-nonverbalのやりとりを通して共感・共有を学んでいく。“face to face”つまり「対面による児童文化」は乳幼児期の子どもにとって非常に重要な意味を持つ児童文化である。

(4) 対面文化（絵本・紙芝居・パネルシアター）への実習学生の対応

対面文化への実習学生の対応（問「次の児童文化を用いる時、あなたは子どもとのやりとりをどのようにしていますか」）の結果が表7である。選択肢は子どもへの言葉のかけ方・言葉のやりとりが消極的～積極的になるよう5段階で作成した。いろいろな場面が考えられるので複数回答とした。

筆者の仮説では、絵本～紙芝居～パネルシアターの順に子どもとのやりとりが消極的～積極的になると考えた。このように考えた理由としては、次のような各児童文化の特徴があるからである。

絵本は、絵本作者のねらいや思いを大切にし、読み手のペースで進められるべき児童文化である。紙芝居は、絵本よりは子ども達とやりとりはするものの、やはり脚本を読みながら進行していく児童文化であり、子どもとのやりとりはある程度制限される。それに比べて、パネルシアターは子ども達と一緒に遊ぶことを大切に考えて進行

していく子ども参加型の児童文化である。

しかし表7からわかるように実習学生の場合、ややその傾向はでたもののほとんど児童文化ごとの対応に差はなかった。どの児童文化も「子どもの声に応答しながら進める」(36~39%)が多く、その次に「こちらから声かけをする」(29~37%)が多くなっていた。この結果を見ると、実習生はこれらの児童文化を実施する時、積極的に子ども達とやりとりをしている姿がみられる。

表7 4つの児童文化への実習学生の対応 ※■は25%以上

	事前におしゃべりをしないように話す	こちらのペースで進める	子どもの声に軽く相づちを打つ	子どもの声に応答しながら進める	こちらから声かけをする	その他
①絵本	13%	14%	17%	37%	30%	2%
②紙芝居	11%	15%	16%	36%	29%	4%
③パネルシアター	14%	10%	12%	39%	37%	2%

なぜ、このような対応になるのであろうか。次の2点が推測される。

ひとつは、実習学生がそれぞれの児童文化の演じ方を理解していない、またはその技術を会得していない事が考えられる。もうひとつは、子ども達を自分が行う児童文化に集中させよう、または興味を持続させようとする気持ちが強く、結果として積極的な子どもとのやりとりになるのではないだろうか。

「言葉のキャッチボール」「声かけ」は子どもの集中力・興味の持続性の観点から重要な役割を持っているが、児童文化にはそれぞれにふさわしい対応がある。子どもの内面の充実に結びつくような対応についての学習が求められる。

(5) 非対面文化 (テレビ・ビデオ) について

テレビ・ビデオ視聴の時の保育士の関り方の結果 (問「実習した保育所では、先生も一緒にテレビ・ビデオを見ていましたか」) を表8に示す。

「ずっと一緒に見ている」「一緒にいるが別のことをしている」「時々部屋を出たり入ったりしている」「子ども達だけで見ている」の4つの選択肢から複数回答を求めたところ、25%は「ずっと一緒に見ている」、残り75%は子ども達だけになったり、保育士の目が行き届かない場面があったりする状況でテレビやビデオを見ている。特に3割以上が保育士不在という結果に不安を覚える。

テレビ・ビデオ視聴には「非対面」という便利さがあるものの、大人 (保育士・親など) が同時視聴することにより、視線・うなずき・言葉を交しあうなどのやりとりを通して感情の共有・場の共有など共感共有の育成の重要な契機になりうる。非対面文化であっても対面的な要素を付与する対応が望まれる。

8

表8 テレビ・ビデオ視聴と先生の存在

	ずっと一緒に見 ている	一緒にいるが別の ことをしている	時々部屋を出た り入ったりする	先生は不在
テレビ・ ビデオ	25%	26%	17%	32%

2. 4つの児童文化についての考察

これらの現状をまとめると次のような特徴や違い、また展望や課題がみえてきた。

(1) 絵本・紙芝居について

絵本・紙芝居には、活用方法において、多くの類似点があることが確認できた。

(i) 日常の基本的な活動として定着している

(ii) 子ども達を落ち着かせる場面で活用されることが多い。

絵本・紙芝居は、読み聞かせ時の子どもの様子からみると、落ち着いて黙ってじっと集中して見ていながらも、子ども達同士の共感や共有の行動も見られる。静的な活動として充実した児童文化ということがいえるだろう。

しかし、絵本と紙芝居の間には次のような相違点もある。

絵本は、絵・お話・ページ数・本のサイズなどが非常に多種多様である。特徴として片手で持てる本のサイズという制約があり、また絵の描き方も遠くから見ることを前提に作られていないため、多人数への読み聞かせには向いていない。しかし、絵本の絵は細部で遊べる楽しさがある。中には字のない絵本もあり、保育者が何もいわないで表紙を見せただけで、ページを繰るだけで、子ども達はおしゃべりをして、イメージを広げて楽しんでいる姿がある。このことから、絵本の絵の持つ力の素晴らしさがわかる。指導的教訓的な言葉がけは子どもの内面世界の広がりやふくらみを阻むことがあるので、読み聞かせの方法をまちがわないようにしたい。保育者は、子ども達の反応を注意して見守りながら、時には言葉の投げかけをしながら、子ども達のイメージや想像力を膨らませるようにして読み聞かせをしていかななくてはならない。

一方、紙芝居はどうであろうか。紙芝居の特徴として、多人数でも見えるように作られている。しかし、枚数や一枚ずつ一方向に抜きながら話を進めるという手法の制限があるため、単純でわかりやすい絵やお話が多いが、反面、絵やお話は多様性に欠けるところがある。さらに大きな特徴として、紙芝居は「芝居」であるため、声で表情豊かに演じることが大切である。時には文に書かれていなくても、子どもの様子に応じて絵の補足説明をしながらイメージを膨らませるように演じることが必要である。

これらの違いを理解したうえで絵本・紙芝居を保育場面に合わせて活用していくことは、乳幼児期の知的環境・情操的環境として重要な位置を占めている。

(2) パネルシアターについて

パネルシアターには、次のような特徴があることがわかる。

(i) 日常的な活動のひとつとして位置付けられている

(ii) 午前の遊びや行事のプログラムとして活用される機会が多い

パネルシアターを見ている時の子どもの様子を見ると、非常に活動的である。パネルシアターを「見る・聞く」というよりも「参加する」「一緒に遊ぶ」といった感覚で子ども達は受け入れているようである。絵本・紙芝居よりも共感・共有度が高く、一体感を育む児童文化といえる。そのためには古宇田亮順が提唱するように「面白いものを見せる」という考えではなく、「一緒に楽しむ」という気持ちが大切である。¹⁰⁾

パネルシアターの魅力のひとつとして、友達と一緒に楽しく参加するため、強い共感体験ができることがあげられる。それによって人間関係相互の強い結びつきを築くきっかけとなり、豊かな情緒や感性を育むことができる。この共感や一体感是人と人との距離を急速に縮める。実習でパネルシアターを行った後、実習生と子ども達との距離感がなくなり、子ども達は実習生を受け入れ、一緒に遊ぼうとする行動が増える。そして、実習生も自然に子ども達と遊ぶことができるようになるということは実習後によく聞く報告である。

また、パネルシアター実施後の子ども達の遊びの様子にも注目すべき点がある。

パネルシアターで歌った歌や手遊びやお話など、一回しか見ていないものでも、子ども達は、遊びの中で自然に再現したり、発展させたりしている姿がよく見られる。

学習効果の高さには目を見張るものがある。今回、この学習効果についての調査はできなかったが機会があったら是非調べてみたいと思う。

パネルシアターが、子どものみならず多くの人々の心を捉えているのは、パネルシアターの絵やその手法が、絵本などの静止画とテレビなどの動画との間にあり、その両方の良さ、面白さを兼ね備えているのではないかと思われる。

しかしながら、その実施状況が50%にとどまっているところを見ると、パネルシアターは製作に時間がかかったり、演じるのにも練習が必要だったりする点が比較的だれでもすぐに読み聞かせることができる絵本や紙芝居と異なるからであろう。今後は手作りの暖かみをもちつつ直接子どもと言葉のキャッチボールをしながら演じるというパネルシアターの特徴をより生かす方向への工夫が求められる。

(3) テレビ・ビデオについて

テレビ・ビデオは、次のように活用されている。

(i) 補助的ではあるが、日常的な活動のひとつとしての位置付けになっている

(ii) 十分な保育士の人数確保が難しい時間帯に活用されている

テレビ・ビデオは他の3つの児童文化と異なり、保育士が直接子どもに読んだり演じたりする必要がなく、スイッチを入れれば見ることができることからこのような活用のされかたをしているといえる。

これは保育所の役割から考えると必ずしも積極的に勧める児童文化とはいえないが、子ども達に与える番組をきちんと選んでいることが確認できたこと、また子ども達のテレビを見ている様子が、決して一方向的になっておらず、子ども達同士での共感・共有がみられることから、テレビ・ビデオも使い方によっては現在よりも活用度の高い児童文化になることが予想される。

子ども達の遊ぶ様子を見るとテレビの登場人物がごっこ遊びに登場することがよくある。絵本・紙芝居・パネルシアターを見た後にごっこ遊びや劇遊びに発展するのと同じ効果を持つことから、番組内容を吟味することによりテレビやビデオについてのとらえ方が否定的な方向のみに偏らないようにすべきであろう。

今後への課題

今回の調査を通して課題として把握できたことを以下に述べる。

1. 対面文化の重要性

近年、ゲームやテレビ・ビデオなど人とのコミュニケーションを必要としない一人遊びやモノを介しての間接コミュニケーションの中で遊ぶことが増えている。このような環境では豊かな感性や共感力、共有力が育つとは思えない。乳幼児期から小学校高学年への時期は認知が目覚しく発達するとともに、共感性が目覚しく発達する重要な時期であり、対人関係力、コミュニケーション力の発達が顕著な時期である。

今、子どもにかかわるさまざまな問題が報告されているが、これらの現状を打破するには、乳幼児期の保育教育の場での「対面文化の復権」が求められている。

文化とは素材である。それを子どもの内面充実の素材としてどのように活用していくかが問われているのであり、質の高い児童文化を子どもに与えることができるような保育者養成教育が求められている。楽しく活動しているから良い、静かにしているから良いと捉えるのでは不十分で、日々の生活において大人（親、保育者）の充実の姿、共感共有を通してこそ、遊びの充実、内面の充実、生活の充実につながる保育教育の機会となるのである。

伝統的な児童文化である絵本や紙芝居、新しい児童文化であるパネルシアターなどの対面文化をきちんと与えることの出来る表現力・技術力・支援力を持つ保育者の存在が非常に重要となる。

「幼児教育における児童文化」研究を通して保育教育において求められる表現力・技術力・支援力について、それぞれの内実の把握を目指したいと考えている。

2. テレビ・ビデオの問題

NHK放送文化研究所による「“子どもに良い放送” 第3回調査報告書：プロジェクトフォローアップ調査中間報告」によれば、0歳時点の全映像メディアの接触時間

は1日平均3時間37分、1歳時点では4時間2分、2歳児では3時間30分である。2歳児で減少しているのは「ついているだけ」の時間の減少である。2歳児の3時間30分の内訳はテレビが1日平均2時間44分、ビデオが43分、テレビゲームが3分で、成長するにつれて視覚映像メディアへの接触は「専念」視聴が増加する傾向がある。¹¹⁾

また、ビデオは安心できると考えている親を持つ子どもの方がビデオ接触時間が長く、ビデオは子育ての助けになると思っている親を持つ子どもの方がビデオ接触時間が長い。¹²⁾ さらに、ビデオを親子で見ている子どもの方がビデオ接触量が少なく、絵本を親によく読んでもらっている子ども、友だちと遊ぶ回数が多い子どもの方がテレビ接触時間は短いことが明らかになっている。協調性・共感性が低い子どもの方がテレビ・ビデオの接触時間が長いことも明らかになっている。

乳幼児と視覚映像メディアとのかかわりを考える際に最も大きな要因を占めるのは、「母親を中心とする保護者のメディア観である」と白石が述べているように、物心つく前からテレビに出会った母親世代はテレビ世代・メディア世代であり、「どちらか」というと活字よりは映像を好む年代」で、テレビをはじめとするメディアがごく早い時期から、自然に彼らの生活のなかに位置づいており、肯定的なとらえ方をする人も増えている。¹³⁾

本調査で明らかになったように保育所での保育にもかなりテレビ・ビデオが活用されている。しかし必ずしも子どもの生の体験や仲間との遊びの体験の機会を奪っているとはいえないものの、今後子どもを取り巻く大人世代が活字よりは映像を好む世代になるとともにテレビやビデオの利用への寛容度が増し、ますます子どもの生活に取り入れられ活用される児童文化になるとことが予想される。こうした現状を踏まえるならば、対面文化である絵本・紙芝居・パネルシアターを子どもに与えていきたい児童文化として位置づけるとともに、対面文化としての認識を深め、子どもの心に届く児童文化として与えられる表現力・技術力・支援力を持つ保育者の養成がますます重要である。さらに、親世代・保育者・保育者志望学生が児童文化の媒介者として自覚を持つこと、児童文化観・メディア観を自覚すること、児童文化環境づくりがますます重要になると考える。

引用文献

- 1) 滑川道夫『児童文化論』東京堂出版, 1971, p.14.
- 2) 滑川道夫 前掲書1) p.14.
- 3) 波多野完治『親と教師のための児童文化講座 I/児童文化とは何か』弘文堂, 1961, p.5.
- 4) 倉橋惣三『幼稚園真諦』フレーベル館, 1976, p.23.
- 5) 倉橋惣三 前掲書4) p.42.
- 6) 東洋〔ほか〕編『子どもと教育: 児童文化入門』岩波書店, 1996, p.15-22.
- 7) 森上史朗〔ほか〕『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2004, p.53-55.

- 8) 小川太郎『講座教育社会学 VIII／児童文化の問題』東洋館出版社, 1957, p.223.
- 9) 原昌, 片岡輝『児童文化』建帛社, 2004, p.208.
- 10) 古宇田亮順, 阿部恵『こうざパネルシアター』東洋文化出版, 1990, p.42.
- 11) NHK放送文化研究所『“子どもに良い放送” 第3回調査報告書：プロジェクトフォローアップ調査中間報告』2006, p.23-24.
- 12) NHK放送文化研究所 前掲書11) p.37-42.
- 13) 白石 信子「幼児はテレビとどのようにつきあっているか：“NHK 幼児視聴率調査”の結果から」『武蔵工業大学環境情報学部情報メディアセンタージャーナル』第4号, 2003, p.24-28.

参考文献

- 1) 日本子ども文化学会編『今すぐ始めよう、子ども文化を取り入れた教育開発』明治図書, 2003.
- 2) 中京女子大学子ども文化研究所編『子ども文化フォーラム4』明治図書, 1999.
- 3) 高山智津子『絵本で育つイメージの世界』清風堂書店, 1996.